

# 南都神道家・今出河文斎による由緒記の編著

向村 九 音

(比較文化学専攻)

## 一 はじめに

近世の大和諸社の由緒記編纂は社家からの依頼等で在地の神道家の手によってなされることがあった。神社伝来の古記口伝等と諸典籍を整合させ、ある程度の一貫性を持った来歴を紡ぎ出すのが彼等の役割である。その説は記紀を始めとする典籍に基づきつつも、従来の伝承から離反し、新たに一社の由緒を規定しさえもした。

大和諸社の由緒生成には「南都」という場が有する特殊性が影響しているだろう。その考察への手掛かりとして本稿では石上神宮・大神神社・大倭神社等に関する著作・写本の残る今出河文斎の活動に注目する(資料参照)。文斎は「南都神覚者」(注1)という意識のもと諸社の神職と連携した活動をしており、その説は南都への広がりを見せるのである。文斎やその周辺人物への検討を通して、近世南都を中心とした由緒編纂の土壌を考察する。

## 二 今出河文斎について

西田長男氏は文斎に関して「はじめ松嶋、のち三枝および今出河(藤原)の氏を称し、通称を益人、名を一友、号を若殿(若殿とも)・如鶏子・

蒼翠軒などともいつた万里小路大納言家の家侍で、神道家として知られ、著書も二三ならず伝えられている。その師は白井接伝で、岡田正利の如きも文斎について伝を受け」、大神・大和・石上三社の研究をすすめたと述べられる(注2)。佐伯秀夫氏も「今出河(河とも書く)一友(生没年不詳)は江戸中期の奈良の卜部神道系神学者。彼の編著『長尾神社略記』では、「吉田家学頭大宗白井中常門人」と記している。元姓松嶋、名は及達・若暇、通称八右衛門、三枝益人・三枝散人・如鶏・文斎とも号した。詳細な履歴は寡聞にして知らないが、続々群書類従所収の『南都七大寺巡礼記』の異本奥書に、享保十四年書写とあるので、そのころまでは生存していたことがわかる。光由とともに、後掲史料に頻出する人物である。」と、石上神宮年預田村光由との縁により数々の石上神宮の由緒記を編纂書写した人物として紹介する(注3)。今回『中臣祓事業秘授略』『中臣忌部切紙口伝秘鈔』の各奥書に享保十五年の年紀を見出したので、没年は一七三〇年以降となる。

佐伯氏は文斎の用いた称号の中に「三枝散人」も含まれるが、『石上布留神宮寺縁起』に見られるこの呼称は、後の書写者である中條台作か江藤正澄の誤写によるのではなからうか。当資料以外に「三枝散

人」を名乗るものがないというのも理由の一つだが、文斎と重なる時代に無名園古道なる人物が「三枝散人」の名で南都古寺社について述作しているの、両者の称号を混同したものと考えるのである。よって文斎の称号は「三枝益人」の方であろうが、この称号は『石上神宮御事抄』(1704文斎書写、1761再校)に初めて見られ、宝永年間前半に多く用いられる<sup>(注4)</sup>。「三枝」というのは率川神社の別称・春日三枝神社から取られているのだらう。無名園古道は「下僕率川近辺に幼年より住居し侍りて」<sup>(注5)</sup>。率川神社の由緒探求に駆られた旨を「率川御子守神社御本縁」に記しており、このことから「三枝」を冠したと考えられる。文斎の居所も添上・添下郡内と知れ、古道と同様の理由から「三枝」の名を用いたのだらう。

石崎文庫蔵『中臣祓事業秘授略』(1730文斎著か<sup>(注6)</sup>)は大神宗次の書写になるが、奥書に「皆／享保十五庚戌歳中夏下旬／亦斎翁藤雲」とあり、「亦斎翁」というのは「文斎翁」の誤りかと見られる。この場合、文斎の称号に「藤雲」を加えることができる。

文斎の述作活動は石上神宮の古社記を編纂すること始まる。宝永元年(1704)四月六日に『石上布留神宮寺伝記』『石上布留神宮要録』『石上布留神宮寺縁起』の三書を田村光由本によって書写したのが現在確認できる最初の文斎の活動である。翌日には『石上神宮御事抄』(1707卜部兼文著か／1705.1文斎再校)をやはり光由本をもとに書写している。これらの書写活動は『石上振神宮二座』(資料注※1を参照)『物部氏口伝抄』(1704.52本文成立／1708.10跋)の著述に結実する。後者奥書には、もともと石上神宮年預田村光由が自身のつとめる年預職は古の斎主首職に当たるとのこと、また「斎神之礼典」、「神宮之本縁」<sup>(注7)</sup>を知るため文斎のもとへ自身の筆記を含む資料数点を持ち込み、文斎が元禄七年(1694)一月十五日に『石上振霊時簡書』(現

存せず)を完成させたということが書かれる。しかし光由は翌年四月六日に六十一歳で亡くなり<sup>(注8)</sup>、元禄十三年一月七日に文斎が石上神宮へ参詣した際に『石上振霊時簡書』を読み上げると、神主・祢宜らの耳を驚かし、その要請により同書をさらに摘要した『物部氏口伝抄』を述作するに至ったという経緯が述べられる。ここで注目すべきは「及宝永改元甲申之歳」、神主高忌火政富、欲乞神宮修復於將軍家、下、向于江戸之時、請神宮故実之伝、於是、依石上霊時簡書文纂而、摘其要記一冊、号物部氏口伝抄授之者也」と、江戸幕府へ社殿修復を要請するための資料に『物部氏口伝抄』が用いられていることであらう。文斎は神主より由緒の作成を直接依頼され、その著書が幕府へ提出されるに至った。さらに後年、文斎は「殿下公命」を受け『石上布留神宮略抄』(1730)を作成したと見られる<sup>(資料注※5を参照)</sup>。この「殿下」に関しては佐伯秀夫氏が「九条輔実が大乘院門跡を通じて下命したのであらう」と推測されている<sup>(注9)</sup>。九条家と直接交渉があったとは限らないが、その依頼を任されるまでになったのである。これらのことより、文斎が南都諸社から一目置かれる神道家であったことが分かる。

文斎の神道家としての活動は石上神宮を起点としたが、後には『大倭神社注進状並率川神社記』附裏書(1706.元三)、『大三輪神三社鎮座次第』(同年12.1)、『三輪山縁起』(1710.10.7)なども書写し、山辺三社の由緒探求につとめる。そして正徳三年(1713)五月には長尾社祝部吉野河盛利の需めに応じ、国史家牒などを参考して作った『長尾神社勘文』一卷を摘要し、『長尾神社略記』を作成した。文斎とこれら諸社の神職の関係は、著作の依頼はもちろん、書写のため写本を貸借できる間柄であった。文斎は広く大和国内の社寺につながるネットワークを有していたことが窺える。

『中臣部切紙口伝秘鈔』(1730)からは大和国外からも文斎を頼る者が訪れたことが看取される。同書奥書によれば、享保十三年(1728)三月に筑紫武雄神社社司宮部佐仲が神道・倭書について学ぶため文斎のもとを尋ねる。佐仲は幼年であり、備忘のため教えられた中臣忌部解除を書き留め、文斎に校合を頼む。その書は長く蔵にしまわれていたが、氷室神社権神主中宮内是清の需により、文斎によって再び述作されることとなる。以上が奥書の大意である。文斎が所持していた南都諸社を結ぶネットワークは、遠く筑紫まで繋がり得る広さを有した。

続いて文斎の師弟・交友関係を整頓するに、文斎を白井接伝(1689-1705)門下とするものには『長尾神社略記』『中臣祓詞浅略題目抄』があり、文斎は接伝から卜部神道を学んだと分かる。

また、文斎が岡田正利と師弟であるという西田説に関しては、白井伊佐牟氏が、『長尾神社略記』跋文に春日若宮神主中臣祐字が文斎を友人と記すことから、文斎と祐字はさほど年齢が離れていないものと推測され、祐字より十七歳年上の正利が文斎の門弟となることに疑問を示している<sup>注10</sup>。國學院大學附属図書館には『石上神宮御事抄』『物部氏口伝抄』『播州峯相記』『鎮魂祭略儀式』といった、文斎本を正利が書写した系統のものが多く残る。年齢の問題は存在するものの、『鎮魂祭略儀式』奥書にも「右享保二丁酉孟秋廿四日従今出川文斎如雞子藤原一友令伝受者也／磯波翁／岡田正利」(享保二年=1717)<sup>注11</sup>とあり、師弟関係であったことは認めてよいように思われる。

さらに先述の通り文斎は南都諸社の神職と広い関わりを持つ。石上神宮年預田村光由、春日若宮神主中臣祐字、手向山八幡宮神主紀延親、長尾神社祝部吉野河盛利、氷室神社権神主中宮内是清、大神若輩らである。

中臣祐字(1678-1715)は今西祐舎の次男にして千鳥家へ養子として入り、春日若宮神主となった。文斎を友人と呼び(前述)、『春日神社記改正』『大和国広瀬神社記』『古事記聞書』を著している。白井氏は祐字の父・祐舎が石上神宮神主・森氏と親交の深かったことと、祐字の死後、祐舎の養子となった祐雪の妻が「三輪社高宮大神朝臣豊房娘拝殿巫女於直」<sup>注12</sup>であったことから、文斎は祐字を通じて大神・石上両社と交渉を持ったのではないかと指摘する。

このほかにも文斎は手向山八幡宮神主紀延親とも交流があったらしく、『大倭神社注進状並率川神社記』附裏書や『大三輪神三社鎮座次第』を文斎が書写した後一年以内に延親がその写本を借用し書写している。また、國學院大學附属図書館蔵『播州峯相記』は八幡宮に将来された播州惣社神主黒装民部家本を文斎が転写させてもらったものである。これらは延親の厚意によるものだろう。延親自身も『東大寺八幡宮神社記并御祭礼記』(前神主延貞の草したもの)を正徳五年(1715)成稿)、『大三輪社勘文』(1712)等を著している。延親の時代は公慶の東大寺復興期に当たり、元禄四年(1691)から八幡宮の造営が始まる。その著作活動には焼失した八幡宮の文書を補完する目的があっただろう。

続いて『巻向檜原明神縁起』(1619年巻向社司喜太浦衛門著／1708年文斎写／1711若輩写)、『二十二社神名記』の書写者に大神若輩がいる。前者は慶長元年(1596)に檜原へ伊勢から天照大神を勧請したことを述べる。後者は卜部兼右(1523著か)から白井接伝(1686写)に至るまで諸人によって書き継がれるが、最末尾の宝永七年(1710)文斎署名部分のみが別筆であり、それ以前の筆跡は前者と一致することから、若輩書写本を文斎が所持したことが分かる。若輩の詳細は不明であるが、十八世紀中頃に文斎本を書写した人物に大神宗次がおり、

宗次は石崎文庫蔵『中臣忌部切紙口伝秘鈔』副本の奥書で「当氷室」<sup>注</sup>と述べ、氷室社神官と目される。大神氏の名は諸社に散見するが、若輩と宗次は時代的にも近く、あるいは若輩も氷室社の関係者ではなからうか。

神官ではないが無名園古道にも言及しておく。古道は『南都名所集』等を著した村井弘道を父に持ち、自身も『奈良坊目拙解』『南都年中行事』等、南都の寺社に関する著作を残す。古道は文斎が享保十四年(1730)四月四日に書写した『南都七大寺巡礼記』(東京芸術大学附属図書館所蔵)を、時を置かず同年五月五日に写しており、両者には近い関係があったと推測される。

文斎と古道、そして祐字の間では率川社の祭祀を藤原是公ではなく大三輪君白堤によるとする説が共有されていた。白堤は『日本書紀』用明天皇元年(586)五月条などにその名を見るが率川社との関わりは不明で、白堤祭祀説を掲げるのは『大三輪神三社鎮座次第』<sup>注11</sup>、『大倭神社注進状並率川神社記』(以上文斎写)、『春日神社記改正』(1704/祐字)、『率川御子守神社御本縁』(1732/古道)である。従来とは異なる祭祀説が、南都の神道家や神職の間で生成・共有されていたことが窺える。文斎は神官との繋がりを強固にすることで、在地の神道家としてその地位を確たるものにしていった。時に従来とは異なる説を採りながらも文斎の書した由緒記が受容され、さらに神社の古記録や秘伝をも取扱うことがあった<sup>注12</sup>。背景には、南都神道家としての文斎の権威が存在したであろう。文斎の述作活動は地誌や名所記などとは異なり、より一社に根を張ったものである。刊行されることはなかったが、後世に残る各社の由緒を規定していったその力は大きい。

### 三 今出河文斎による由緒記の述作『長尾神社略記』を中心に

文斎の著作は大きく二系統に分けられるだろう。南都諸社の由緒記と、中臣祓・鎮魂祭などに関する吉田神道家としての述作である。後者には『中臣祓詞浅略題目抄』、『中臣祓事業秘授略』、『中臣忌部切紙口伝秘鈔』、『鎮魂祭略儀式』、『十種神宝秘伝記』中「鎮魂祭次第記」がある。神道家としての文斎の思想を知るためにはこれらへの検討が欠かせないが、本稿ではまず文斎が南都諸社の由緒をいかに扱ったかを知るため由緒記の考察を優先する。文斎がその由緒を編纂書写した神社には、石上神宮、大倭神社、大神神社、檜原神社、長尾神社などがあるが、本章では『長尾神社略記』(翻刻参照)について検討する。

長尾神社は『延喜式』神名帳、葛下郡十八座の内に「長尾神社大月次新嘗」<sup>注13</sup>とされる。古代の祭祀については不詳で、神社の由緒を記すものには当資料(以下『略記』)と『放光寺古今縁起』(正安四年(1302)か/審盛/以下『縁起』)がある。まず、『略記』に先行する『縁起』の記述を確認しておく。放光寺には鎮守として葛下郡の長尾社が勧請されており、ここに長尾社の由来が記される(注14)。

#### 一当寺鎮守神殿三所

南御殿長尾五所 葛下郡惣社振別ナリ

中御殿八幡三所 源氏宗廟大菩薩

北御殿地主御霊 大原氏神ナリ 付 北小社

長尾者葛下郡万歳里辺辰巳方ニ奉ル<sup>アカメ</sup>崇ニ内外両社ヲ一、即伊勢太神宮、御垂迹也、昔大友皇子奉<sup>レ</sup>責ニ 天武ノ御門ヲ一、于時逃<sup>ニ</sup>籠<sup>シテ</sup>吉野山ノ

奥ニ<sup>一</sup>拜<sup>シ給テ</sup>太神宮ヲ一賜<sup>リ</sup>大將軍ヲ一<sup>向給フ</sup>美濃尾張ニ一、<sup>ハシ</sup>発<sup>シテ</sup>官軍ヲ一相

隔<sup>テ</sup>堺河ヲ一<sup>ハシ</sup>遂<sup>ク</sup>二合戦ヲ一、<sup>ハシ</sup>遂使大友ノ皇子軍兵忽<sup>ニ</sup>摧<sup>ク</sup> 天武天皇<sup>カチ給</sup>雄

二合戦ニ一、再<sup>ハシ</sup>即位<sup>ニ</sup>、<sup>ハシ</sup>為<sup>ニ</sup>彼ノ報賽<sup>ヲ</sup>一以<sup>テ</sup>葛下ノ郡ヲ一<sup>ハシ</sup>献<sup>シテ</sup> 太神

宮ニ一<sup>ハシ</sup>永定<sup>ム</sup>三神地<sup>ト</sup>一、<sup>ハシ</sup>名<sup>ル</sup>三五社<sup>ト</sup>者内宮外宮ニ奉<sup>テ</sup>加<sup>フ</sup>詠方住吉勢田<sup>カチ給</sup>ヲ一



是云<sup>ニ</sup>五所<sup>ト</sup>、号<sup>スル</sup>ハ<sup>ニ</sup>長尾<sup>ト</sup>者<sup>ハ</sup>大和国城上ノ郡<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>一ノ智男<sup>一</sup>生<sup>ス</sup>ニ容  
貌<sup>ノ</sup>女<sup>一</sup>神人<sup>カミトノミヤ</sup>苾<sup>レ</sup>家<sup>ニ</sup>夜<sup>ル</sup>窃<sup>ヒ</sup>嫁<sup>ツ</sup>女<sup>ニ</sup>、曉更<sup>ニ</sup>早<sup>ク</sup>還<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>セ</sup>其<sup>ノ</sup>形<sup>ヲ</sup>  
、即<sup>チ</sup>集<sup>ニ</sup>緋<sup>一</sup>糸<sup>ヲ</sup>付<sup>ク</sup>神人<sup>ノ</sup>裙<sup>モ</sup>、遥<sup>ニ</sup>尋<sup>ル</sup>ニ行方<sup>ヲ</sup>到<sup>レリ</sup>長尾<sup>ノ</sup>宮<sup>ニ</sup>  
曳<sup>ニ</sup>入<sup>ル</sup>社内<sup>ニ</sup>、仍<sup>テ</sup>号<sup>ス</sup>ニ長尾<sup>ト</sup>一

ここでの長尾五所は内外両宮と諏訪・住吉・熱田である。長尾が伊勢の垂迹とされる背景として、大神宮に祈念した天武天皇が壬申の乱に勝利し、長尾を神地として大神宮へ献上したことが記される。さらに長尾の名について、城上郡の女のもとへ「神人」が通ってくるが姿を見せないで糸を裾に付けたところ長尾宮の社内に入った、よって「長尾」というと述べられる。この神婚譚は三輪・大物主神の苧環型神婚譚に近似しており、長尾神が城上郡の女性ののもとへ通っているところから大神神社（城上郡）が連想させる。

ところで『略記』は全体が、長尾神伝之儀・長尾鎮座之儀・長尾神階之儀・長尾臨時奉幣之儀・長尾四度官幣之儀・吉野国栖奏曲之儀の六段と奥書・跋文から成る。正徳三年（1713）五月の文斎奥書には「此一冊者応長尾社祝部吉野河盛利之需検国史家牒且雑古老口伝而遍集長尾神社勘文一卷然文繁故摘其要便覧云」<sup>注18</sup>と、文斎が長尾神社祝部の求めに応じて作った『長尾神社勘文』（現存は確認されず）をさらに摘要したものが『略記』であると述べられる。続く同年同月の跋文は、先述の通り春日若宮神主中臣祐字による。

『略記』は祭神に〈左殿〉豊御富登命Ⅱ井光Ⅱ水光姫（白雲別命女）、〈右殿〉白雲別命（祭祀年代は不詳）を当てる。冒頭・長尾神伝之儀においては豊御富登命が吉野連の祖に当たり大和国吉野郡吉野神瀬御蔭井に坐すこと、光を放つ尾が生え金精があり、祈雨の靈験あらたかなことが述べられる。続いて神武東征に際し、天皇が吉野で尾の光る

女人Ⅱ豊御富登命と、やはり尾の生えた石押比古（吉野国国栖部等始祖）に出会ったと書かれる。ここで両神はそれぞれ「水光姫」「国栖」と天皇より命名される。これらの記述は『新撰姓氏録』（以下『姓氏録』）大和国神別の「吉野連」「国栖」の二項に最も近く、さらに『日本書紀』『先代旧事本紀』も参考したと見られる。長尾への石押比古の祭祀は言及されないが、その父である天昇石火押別命が天降白雲別命と兄弟であるとされ、後述の春秋例祭において吉野国栖部等が国栖舞をつとめ、楽を吉野連が奏す由縁が独自に説かれる。

長尾鎮座に関して『略記』は応神天皇の御世に水光姫が葛城山麓の三角磐へ来臨し、その子孫である吉野神瀬加称比足尼（『姓氏録』では加弥比加尼）が長尾へ遷宮したとする。これは『縁起』に記された天武朝の伊勢神宮への神地寄進に先行しており、神社の由緒を古く遡らせようとした意図が窺える。吉野連の祖である加称比足尼によって豊御富登命が祀られたことが説かれれば、長尾社祝部吉野河氏と祭神の縁が強固なものとなる。『略記』の目的はここにあったであろう。

祭神を豊御富登命・白雲別命とする説は先行資料に見られず、文斎あるいは吉野河氏によって喧伝されたのであろう。『大和志料』には「祭神ハ天照大神豊受大神ナリ、創立ノ由緒正安ノ放光寺縁起ニ詳カナリ、参考スヘシ、然ルニ今水光比売<sup>ヒメ</sup>トスルハ南都人今出河氏ノ作為セル社記ニ拠ラレタルモノナレトモ其書牽強付会ニシテ信スルニ足ラサレハ今之ヲ取ラス。」<sup>注19</sup>とされ、おそらく同時代にも批判があったであろうが、現在に至るまでこの祭神説が採られている。諸説の存在が想定される中で一社の祭神説を規定していくには、やはり南都諸社について著作を持つ文斎の名が有効にはたらいたと見られる。

『日本書紀』『先代旧事本紀』は豊御富登命に性別を与えないが、『姓氏録』は女人とする。『略記』もこれと同じ立場を取り、加称比足尼

の前に現れた水光姫は龍女（夢中）、白蛇（現実）の姿である。こうした長尾神の姿は三輪明神を連想させ、『縁起』に見た神婚譚も考え合わされるが、文斎は三輪との関連を追究しない。これは豊御富登命を女神とすることが『縁起』の説く神婚譚と矛盾するためであろう。文斎は祈雨に靈験のある龍女としての長尾神を採ったのである。

さらに『略記』は「長尾は御旅所の木の御社の御井の堤に梅の花咲く」という神詠（足尼の夢中）によって、神功皇后の宮殿・若桜宮旧南殿を用いて木の御社を建立、加称比足尼によって豊御富登命が祀られたことを述べる。これは他文献に見られないことであり、一社の由緒を古く権威づけようとした意図が窺える。

本文末部の吉野国栖奏曲之儀においては、応神天皇が吉野へ行幸した際に国栖部兄弟が酒を献じたこと（記紀が典拠）、その時に長国栖意世古の名を天皇より賜ったこと（『姓氏録』は孝徳朝のこととする）、允恭朝に国栖部が土毛の栗菌魚類を献じ歌舞をつとめ、以降節会の例式となったという吉野国栖奏曲の由来（『姓氏録』が典拠）が記される。本文全体を通して吉野国栖との関わりで長尾神社の由緒が説かれることには、吉野河氏が祀る社であるという主張を認めることができるだろう。

#### 四 おわりに

今出河文斎は諸社の由緒記編纂を行ったが、その活動は『長尾神社略記』の例に見たように一社の神職との結び付きの上に成り立っていた。神職から授けられた古伝等は文斎にとってその著書の内容を保証するものであったろうし、諸社の由緒を扱う神道家としての文斎の名は新しく作成された由緒記を権威づけたであろう。両者は互いを補い合う関係にあった。文斎はこうした大和諸社との結び付きを通して、

南都の神道家として活動していたのである。

大三輪君白堤による率川社祭祀説の例からは、一社の由緒が当該社のみならず諸社神職や在地の神道家の間で生成・共有され得るものであったと言える。文斎の編著作には、林立する諸社との微妙な関係の上で近世の大和諸社の由緒が新たに生成されてきた過程が窺えるだろう。彼らが語った説は国史家牒・古老口伝などの引用と同じ文脈で語られ、時にそれらに裏付けられ、一社の由緒を新たに方向付けていったのである。

〔注1〕『石上布留神宮略抄』奥書に見る。引用は『神道大系』神社篇

12 大神・石上（神道大系編纂会／198912）に拠る。

〔注2〕『群書解題』第一上・神祇部一（続群書類従完成会／1962）p8391

〔注3〕『神道大系』神社篇12のうち『石上神宮御事抄』解題より

〔注4〕他に『物部氏口伝抄』、『中臣祓詞浅略題目抄』、國學院大學附属図書館蔵『菅家御伝記』、同『播州峯相記』（以上、宝永年間前半）、『三輪山縁起』に見られる。

〔注5〕『神道大系』神社篇5 大和国（神道大系編纂会／19873）

〔注6〕石崎文庫所蔵本を報告者が翻字。スラッシュは改行を示す。

〔注7〕『神道大系』神社篇12

〔注8〕光由忌日と重なることから、一七〇四年四月六日～五月二日の一連の古記録書写活動は光由追悼の意も込められるだろう。

〔注9〕『神道大系』神社編12のうち同書解題より

〔注10〕白井伊佐牟『石上・大神の祭祀と信仰』（国書刊行会／19914）

(注11) 國學院大學附屬図書館所蔵本を報告者が翻字。スラッシュは改行を示す。

(注12) 『中臣祐雪亡妻追悼記』(『大神神社史料』七／大神神社史料編修委員会／1980.7)

(注13) 石崎文庫所蔵本を報告者が翻字。

(注14) 西田長男氏は当資料を今出河文齋による偽作とされ(『群書解題』第一上・神祇部一／「大神・大和・石上三社の縁起の偽作」(『国史学』第72・73号／1960.3)、のち『大神神社史料』三(1971)再収)、報告者も別稿にて今出河文齋による再編の可能性を論じた。なお、西田氏は『大倭神社注進状並率川神社記』について文齋偽作を唱えられる。

(注15) 『十種神宝秘伝記』中「鎮魂祭次第記」

(注16) 『新編国史大系』26(黒板勝美編／吉川弘文館／2000.11)

(注17) 保井芳太郎『大和王寺文化史論』(大和史学会／1987)に拠る。読点は任意。

(注18) 注10に同じ。白井氏は文齋著作の基盤となる本勘文や『石上振霊時簡書』の存在を疑われる(1975)。

(注19) 『大和志料』下巻(齋藤美澄編／歴史図書社／1970)

## 【翻刻】『長尾神社略記』

凡例

※奈良県立図書館蔵本(奈良県庁文書(明治五年中 郷村社并神官配当禄等調ノ件 社寺之部 庶務課)所収)を報告者が翻字。読点は任意。

※割注は「」を付して開いた。割注の中に注記が入る場合は《》で

示している。また、小字で記載されたものにも□を付した。  
※【】は挿入を表す。

長尾神社略記 「(表紙)

長尾神社略記

謹考大和国葛下郡長尾神社一座者所謂吉野連等所祭白雲別命之女豊御富登命也、亦曰井光、亦曰水光姫(神名帳新撰姓氏録神祇秘抄)、嘗隱坐大和国吉野郡吉野神瀬御蔭井(案古記草木枝葉相交下陰景所在并称曰御蔭井也)、故以御 「(1オ)

富登為神名乎、祈雨得驗異于他、今依典籍按之此神生尾放光者蓋有金精也、因茲掌降雨鎮井中歟、此靈德最明也、

人皇最初神日本磐余彦諡神武天皇東征五年歲次戊午秋八月天皇欲省吉野之地乃從菟田穿邑(在菟田県)親率輕兵巡幸焉、至吉野 「(1ウ)

神瀬遣人汲水、使者還曰、有女人出自井中、光而生尾、天皇召問之、

汝何人、对曰、臣是地祇、天降白雲別神之女也、名豊御富登命、天皇即名水光姫、此則吉野連等始祖也、更少進(或云入其山)到吉野河上

亦有生尾男人披磐石而出、于時天皇御覽即入磐穴虚、須臾又出遊、 「

(2オ)

窃【窺】之喚問之曰、汝何人、答曰、臣是地祇、天昇石穗押別神之男也、名石押比古、天皇即名国栖、此則吉野国栖部等始祖也、天皇縁河水西行至河尻(在宇智郡阿太邑也)云々(日本書紀旧事本記古事記新撰姓氏録神祇秘抄等書)、

窃考天降白雲別命与天昇石火押別命 「(2ウ)

連枝而氣吹雷命之子也乎

右長尾神伝之儀

謹按泊乎人皇十六代菅田謚心神天皇御世水光神豐御富登命從于吉野神  
瀨御蔭井來臨葛城山麓三角磐〔社去西南凡四五町許〕、先是豐御富登  
命之後葉吉野神瀨加稱比足 一〔3才〕

尼〔長尾社祝部吉野連等遠祖也〕遷居葛城山麓長尾〔或云橿原〕之土地焉、  
加稱比足尼夢覺三角磐有神顯龍女形告曰、吾欲隱坐長尾之土地、汝白  
布衣後綯統布借吾哉、足尼如夢告調衣服往三角磐視之石上在白蛇、足  
尼意知白蛇者彼神靈而以衣服奉覆其尊像一夜宿之、亦夢訓 一〔3ウ〕

曰、長尾之土地奉遷豐御富登命而祭之、其上覆磐石〔今社森内北生叢  
其中在苔座石、此石下為彼御蔭井也〕、尔來稱此地云長尾矣、蓋淨衣  
布衣等後裔長之起于此時也、尾籠〔訓字古、音肥弄〕言亦始焉、然後  
加稱比足尼夢中以歌告曰、長尾〔波〕御旅所〔乃〕木身屋代御井〔乃〕  
堤〔尔〕梅〔乃〕花開、於是足 一〔4才〕

尼奏聞夢相神詠歌、時天皇聞賜之被進若桜宮旧南殿〔神功皇后之宮殿  
也〕、建立木御屋代於御井堤邊、令加稱比足尼奉齋豐御富登命焉、古  
來里諺稱当社謂紫震殿〔南殿名〕造堂是緣也、蓋上代神殿一座耳、後  
世益造一殿相分左右為二座、以左殿〔北方東向〕 一〔4ウ〕

為水光神豐御富登命也、右殿〔南方東向〕祀御祖神白雲別命、其年紀  
未分明、

#### 右長尾鎮座之儀

人皇五十五代文德天皇<sup>(74)</sup>喜祥四年〔辛未〕正月廿七日〔庚子〕詔五畿  
内七道諸国大小神祇有位更進本位一階無位新叙正六位上焉、大和 一  
〔5才〕

国長尾神進昇本位〔正六位上〕一階奉授從五位下〔文德実録神階記曆  
代編年集成〕、

人皇五十六代清和天皇貞觀元年〔己卯〕正月廿七日〔甲申〕京畿七道  
諸神進階及新叙、惣二百六十七社奉授、大和国從五位下長尾神從五位

上〔三代実録類聚国史〕、 一〔5ウ〕

人皇五十九代宇多天皇寬平九年〔丁巳〕十二月三日〔甲辰〕五畿内七  
道諸国大小神祇三百四十社〔本位神階從五位下已上〕各進神位一階  
矣、長尾神進昇本位〔從五位上〕一階奉授正五位下、尔來天下諸社  
六千七百有八座進本位加一階〔無越階例〕、及天慶三年正月永保元年  
二月永治元年七月治承四年十二月 一〔6才〕

元曆二年三月〔新国史元曆二年大政官符扶桑略記源平盛衰記〕正治二  
年四月貞応三年三月宝治三年二月弘安四年七月凡九箇度如此、人皇  
九十代後宇多院弘安四年〔辛巳〕七月朔〔甲午〕長尾神進昇本位〔正  
五位下〕九階奉授正二位者也乎、此大元兵軍降伏祈禱云々〔石上布留  
神宮緣起神階追考諸社根源記高野丹生姬社記等書〕、 一〔6ウ〕

#### 右長尾神階之儀

人皇五十七代陽成天皇元慶元年九月廿五日〔癸亥〕分遣中臣齋部兩氏  
人於五畿七道諸国班幣境内、天神地祇三千一百三十二座緣奉大嘗會也、  
長尾神社者神祇官帳所載天神地祇三千一百三十二座之内 一〔7  
才〕

座也〔三代実録神明帳〕、

#### 右長尾臨時奉幣之儀

長尾神社者大社列官社預四度官幣也、上古每年春二月四日〔名云祈年  
祭〕夏六月十一日冬十一月十一日〔並名云月次祭〕同月中卯日〔若有  
二卯時用下卯日也、名之新嘗祭〕、於山州帝都神祇官中臣氏人宣祝詞  
 一〔7ウ〕

齋部氏人班官幣焉、諸社祝部等受官幣歸其社獻上神前敬祭之、此謂四  
度官幣〔金義解延喜式神名帳十三箇條意見等書〕、

#### 右長尾四度官幣之儀

謹案当社豐御富登命与石押比古命親屬神也、因以昔在春秋例年之祭礼



神楽 「(8才)

〔俗云葛舞亦曰国栖舞〕、歌舞人從吉野河上国栖部等來而奏之、其時神樂笛吹工者当社祝部吉野連〔今称吉野河氏〕等也、〔人皇十六代譽田諡応神天皇十九年十月行幸吉野宮時国栖部兄弟二人來朝之、因以醴酒獻于天皇而歌之曰、檀能尾尔横白乎造横白釀留御酒甘羅尔聞持飲麻呂勝、既訖則打口以仰咲、時詔賜名曰長国栖意世右次弟世古云々、人皇二十代允恭天皇八年七節吉野連国栖部等進土毛《栗菌魚類》年御贊即国栖部等歌舞吉野連等笛吹之、尔來每年諸節会吉野連国栖等獻土毛

「(8ウ)

御贊奏歌曲為例式、然中世兵乱以來中絶不朝帝都至今每年正月元旦節会被行此遺風、謂吉野国栖奏曲也、

右吉野国栖奏曲之儀

于峩

正徳三癸巳之歲仲夏上弦

今出河如雞誌 「(9才)

※奈良県立図書館情報館所藏本と長尾神社所藏本を校合するに、前者において奥書・跋文が脱落するほかは大きな異同はないと言える。

※以下、白井伊佐牟『石上・大神の祭祀と信仰』P266-7(国書刊行会／1991.4)(長尾神社所藏本を翻刻)を参照し、奥書・跋文を掲載する。読点は任意。

# 奥書

此一冊者心長尾社祝部吉野河盛利之需檢国史家牒且雜古老口伝而遍集

長尾神社勘文一卷然文繁故摘其要便覽云

于峩

正徳三癸巳之歲仲夏上弦

吉田家学頭大宗白井中常門人

今出河如雞一友

# 跋文

跋

友人今出河如雞參考大和国葛下郡長尾神社神伝鎮座來由等而録为一卷、携來之請跋於予、予閱覽之、其所考悉捫国史家牒且親到于彼神地而聞古老伝相共弁論之詳其說矣、嗚呼如雞集録之也有敬神之実、而然予雖不肖也感其德功而遂為之跋、

正徳三龍次癸巳仲夏念二日

春日若宮神主正四位下中臣植栗連祐字

## 資料 今出河文斎編著・書写資料一覧

※文斎編著・書写年次の不明なものは最後に挙げ、文斎の関与した時代順に番号を付した。丸付き番号の方が編著を表す。

番号	書名・所蔵先	成立年次／作者・編者	書写経緯	その他
①	『石上振霊時簡書』 (現存せず)	1694.1.15文斎著		⑦『物部氏口伝抄』奥書に名が残る。文斎が光由提供(1693.11)の資料をもとに作成。
2	『石上布留神宮寺伝記』	1570内山永久寺威徳院勝舜	1704.4.6文斎	
3	『石上布留神宮要録』	1634桃尾山昭堧著	1704.4.6文斎	
4	『石上布留神宮寺縁起』	1635桃尾山昭堧著	1704.4.6文斎	以上三点はまとめて光由本を書写。
5	國學院大學附属図書館蔵 『石上神宮御事抄』	1270卜部兼文著か	1704.4.7光由相伝本を文斎が書、1705.1再校	同館蔵『物部氏口伝抄』『大三輪神三社鎮座次第』と同筆で、岡田宗殖の書写と目される
⑥	『石上振神宮二座』	1704.5.2文斎著か(※1)		『石上振霊時簡書』を摘要したものか。『物部氏口伝抄』をやや簡略にした内容。
⑦	『物部氏口伝抄』	1704.5.2文斎著／1708.10文斎跋	1719.5岡田正利／1741.2岡田宗殖	寺社奉行提出のため神主の要請に応じ作成。(※2)
⑧	國學院大學附属図書館蔵 『中臣祓詞浅略題目抄』	1705?12文斎著	和州田原和田邑南之坊行真	外題に「神秘抄」とあり同館はその名で登録。
9	手向山八幡宮蔵『大倭神社注進状並率川神社記』附裏書	1167?大倭直盛纂	1706.元三文斎／ 1706.11.17紀延親	裏書は斎部氏家牒、斎部禊詞、穴師神社・鏡作神社の由緒を扱うが、類従本系統の本文はこれを含まない。
10	『大三輪神三社鎮座次第』	(※3)	1706.12.1文斎写	手向山八幡宮蔵本は紀延親写(1707)。國學院大學附属図書館蔵本は岡田正利・宗殖(1741.5.12)写。
11	國學院大學附属図書館蔵 『菅家御伝記』	1106菅原陳経勘作	1706.12.18文斎校訂	
12	國學院大學附属図書館蔵 『播州峯相記』	1349末頃	1707.4.5文斎写／岡田正利写／1741.7.5岡田宗殖写	文斎は上司(紀)氏蔵本を転写し異本と校合。
13	石崎文庫蔵『二十二社神名記』		1710.10文斎写(※4)	文斎署名のみ別筆で判あり。本文は大神若輩の筆跡。若輩書写本を文斎が所持したか。
14	『三輪山縁起』	1551.4.19?	1710.10.7文斎写	

⑮	『長尾神社略記』	1713.5 文斎著		祝部吉野河盛利の求めに応じ、『長尾神社勘文』(現存せず)を述作。同書を摘要したものが本略記である。跋は春日若宮神主中臣祐字。
16	國學院大學附属図書館蔵 『鎮魂祭略儀式』	1264.41 ト部兼文序	1717 文斎が岡田正利へ伝授・書写	
⑰	天理大学附属図書館蔵 『石上布留神宮略抄』	1720.8 文斎か <sup>(※5)</sup>		文斎から田井庄村公石見へ授けられる。
⑱	天理大学附属図書館蔵『十種神宝秘伝記』中『鎮魂祭次第記』	1722.11.15 文斎著		<sup>(※6)</sup>
19	東京芸術大学附属図書館蔵 『南都七大寺巡礼記』	15世紀中頃か	1729.4 文斎写／1729.5.5 無名園古道写	文斎奥書には享保七年(1721)に大乘院から「巡礼記両冊」を借り受け書写したことが書かれる。奥書に「崑／享保十五庚戌歲中夏下旬／亦斎翁藤雲」とあり、あるいは「亦斎翁」は「文斎翁」の誤写かとも見られる。
⑳	石崎文庫蔵『中臣祓事業秘授略』	1730.5 文斎著か	1759.7 大神宗次写	
㉑	石崎文庫蔵『中臣忌部切紙口伝秘鈔』	1730 文斎著		氷室社権神主中宮内是清の需に応じ述作 <sup>(※7)</sup>
?	『舞踏事業秘授略』			一冊／類・雅楽／写・多家(『国書総目録』)

(※1) 『石上神宮二座』奥書「右者、神宮頭物部朝臣光由之口伝也、応<sup>レ</sup>神主布留宿祢政富之需、稽<sup>ニ</sup>之於典籍、参<sup>レ</sup>之以<sup>三</sup>古伝、遂筆<sup>レ</sup>之、相授者也、／宝永元年仲夏第二日／松島一友／有<sup>レ</sup>判」(『神道大系』神社編12、スラッシュは改行を示す)は別葉に記載され、『物部氏口伝抄』跋文前の記述とはほぼ同一であることから、これを『石上振神宮二座』の成立年次に適用することには注意が払われる。しかし内容的には『物部氏口伝抄』同様『石上振靈時簡書』を摘要したものと見られ、文斎著作の可能性は高い。

(※2) 『物部氏口伝抄』奥書からは宝永元年(1704)に神主の要請により「物部氏口伝抄」が著され、宝永五年(1708)に跋文を加えたことが読み取れる。(※1)に述べたように『石上神宮二座』と『物部氏口伝抄』の本文がほぼ重なることから、実際には前者が宝永元年に成立した「物部氏口伝抄」に当たり、現行『物部氏口伝抄』は宝永五年に文斎が跋文を書き加えた際、改訂を施したものではないかと推測される。

(※3) 『大三輪神三社鎮座次第』奥書(別宮小社記事末)はそこに名のあがる「北畠大納言殿」「今出河宰相殿」を同時に満たす者が存在せず、信憑性に欠ける。本文は三部に分けられるだろうが、第二部に当たる別宮小社記事で『先代旧事本紀大成経』に近似する祭神が載るな

ど、後世の増補が窺える記述が含まれる。文斎の業績やその書写本に遡る本が発見されないことから、この増補改訂を行ったのは文斎ではないかと考えられる。ただし第一部の神社の由来を記す箇所に関しては、文斎書写本を直接書写したと見られる諸本に共通して異本校合の注記が見られ、文斎以前の人物が異本校合を行ったことが分かる。本資料は先行資料を用いつつ文斎によって編纂（増補改訂）されたものと言えるだろう。

（※4）奥書には1543.10.7ト部兼右／1593.11.20 楊憲／1627.11.16 平常吉／1659.11.10 白井樹麻呂／1684.11 平程翁／1696 白井接伝／1710.10 文斎の署名あり。

（※5）殿下の公命により述作したことを記す享保五年（1720）の奥書には署名がなく花押のみあるが、この花押は他の文斎花押と一致しない。しかし直後に「右布瑠神宮略称者、南都神覺者今出川八右衛門ヨリ、田井庄、村公石見エ授ル者也」（『神道大系』神社編12）と記され、享保五年の述作も文斎によるかと推測される。

（※6）『十種神宝秘伝記』は「物部氏十種瑞宝秘伝」と「鎮魂祭次第記」（中表紙に「鎮魂祭次第記上下 并十種神宝秘伝要用故共記 下巻 八八剣之氣之祓」と記載。引用は『神道大系』神社編12より）から成る。前者には奥書がないが、「鎮魂祭略次第」末には作者として文斎の名がある。以降の十種神宝・八剣祓について記す箇所も、日付こそ異なるものの共に享保七年（1722）の年紀を有し、田村光由・中臣祐字からの伝授を引くので、文斎による編纂と見做せるだろう。

（※7）石崎文庫には正本・副本が残る。正本は是清署名のみ筆跡が異なり、文斎周辺人物が書いたものを是清へ授けた本に当たるか。文斎署名には判が押される。大神宗次による副本奥書（明和四年（1766）九月上旬）には大神秀量所持本を借用し書写した旨が記される。正本・副本の間に大きな異同はない。



# **The books of histories about shrine in Nanto were written by Scholar of Shinto: Bunsai Imadegawa**

CHIKANE Sakimura

Bunsai Imadegawa who was alive around between the 16th century and the 17th century had searched for histories of shrine's in Yamato as a scholar of Shinto in Nanto. First of all, he was asked to write books about Shrine's histories by Shinto priests and his books determined some of shrine's histories and traditions, but they were different from that the others had written. Particularly, in this essay, I pick up "Nagao-Zinzya-Ryakki" from his one of books and arrange his activities. I hope my essay can gain a foothold to know in how to be recorded histories of shrines in Nanto in the Edo per.